

新聞の中の外来語

33期生

I はじめに

次の文を読んで欲しい。

テレビ受像機と情報センター（コンピューター）をつなぎ、受像機にセットした専用装置のキー盤を押してリクエスト（注文）すれば、コンピューターが目当ての情報を捜し出してブラウン管に映し出す一簡単にいえば、これが新メディア……

たった3行の間に、9つもの外来語が書かれている。何故、外来語はこのように氾濫し、その数は増えるのか。この問題は、日本語に少なからぬ影響を与える。

私はこのようなことに興味をもち、今年ももう一度「新聞の中の外来語」について研究した。

II 研究方法

3年間に渡って、対象とした新聞と日付は次の通りである。

1979年—朝日新聞：7月10日～16日

1980年—朝日新聞：7月14日～16日

サンケイ新聞：7月14日～16日

1981年—朝日新聞：7月22日～24日

日本経済新聞：7月22日～24日

これらを使って、数々の調査をおこなったが、本稿では、今年の研究結果を示すとともに、3年間のまとめを述べたい。

もう一つ、新聞の中の外来語から離れて、「外来語」を考えてみたい。

III 研究結果

(1) 新聞の中の外来語について

①まず、一面に現れる外来語ののべ数を見てみよう。

朝日新聞（1979年） 54

（1980年） 59

（1981年） 64

サンケイ新聞（1980年） 62

日本経済新聞（1981年） 99

朝日新聞の外来語ののべ数は、年を追って5つずつ増えている。何故外来語は増えるのかについては後で述べる。

外来語がこのように着実に増えていることは、恐ろしいことだと思う。3年前も今も、新聞

の記事の字数はあまり変わっていない。その中で外来語が増えていることは、その増えた分だけ日本語が紙面上から消えていることを意味する。このままいけば、カタカナだらけの新聞になるかもしれない。

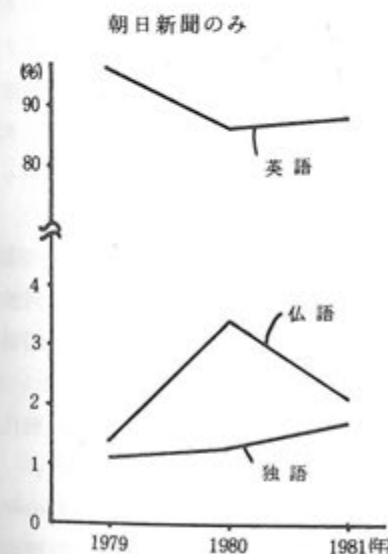
一方、朝日新聞以外の中で極めて数が多かったのは、日本経済新聞だ。しかし、これにはそれ相応の理由がある。それは、(a)経済の動きに関係する金の単位名（ドル、フラン、マルク等）が他紙以上に多いこと、(b)世界の動き、情勢に大きくかかわっているため、情報量が多いため、適当な日本語訳がすぐないこと、(c)その上、経済用語には外来語が多いこと、である。

②頻度の高い単語について見てみよう。まず、各紙の頻度の高いもの3つを書く（ただし単位はのぞく）。

新聞名	1位	2位	3位
1979年 朝日	エネルギー	チーム	リーグ
1980年 朝日	クーデター	メーカー	リーグ
サンケイ	エネルギー	センター	リーグ
1981年 朝日	サミット	リーグ	センター
日本経済	サミット	メーカー	ディスカウント

このことから、外来語には2つの種類があることがわかる。1つは常時掲載型である。これは、毎年必ず多い数がある単語のことだ。上の場合だと、リーグ・チームがこれに当てはまる。もう1つは、短期掲載型である。これは、一時期に多く掲載される単語のことだ。上の場合だと、クーデター・サミットがこの典型である。サミットの方は、偶然この調査をした時と、オタワサミットの開催が重なったため、多く現れた。このようなことから、新聞の中の外来語は世の中の動きにより大きく作用されることがわかる。なお、単位を入らなかった理由は、もし入れると各紙の3つの単語の半分以上が単位になってしまうからである。

③語源語の割合を年ごとに追ってみよう。



1979年から1980年にかけて見れば、フランス語・ドイツ語が伸び、英語が減少している。そして、次年にかけてもこの調子でいくと思えた。しかし、1981年の結果でその考えを訂正しなくてはならなかった。これによって私は、外来語の中で英語は何%、フランス・ドイツ語はそれぞれ何%というのが決まっていると思う。言いかえると、どの年も語源語は一定の割合を示すことを表す（この場合だと、英語は全外来語の90%前後、フランス語は同じく2%前後、ドイツ語は同じく1.5%前後になる）。

また、英語が断然多いのは、(a)アメリカとの関係が他国より密なため、(b)英語が現代の国際語・世界語としての地位にあるため、と思う。私はこのことから、今後もこの傾向が続くものと思う。

フランス語、ドイツ語、オランダ語、イタリア語から外来語を紹介しよう。

フランス語—アンケート・エリート・ズボン・デビュー 等

ドイツ語— エネルギー・ゼミナール・テーマ・ワクチン 等

オランダ語—ガス・ゴム・コーヒー 等

イタリア語—テンポ・ピエンナーレ 等

⑤借入時代について次に見てみよう。借入時代とは、その外来語が日本語に入った時代のことである。それでは結果を見よう。(カッコ内は全体に対する割合)

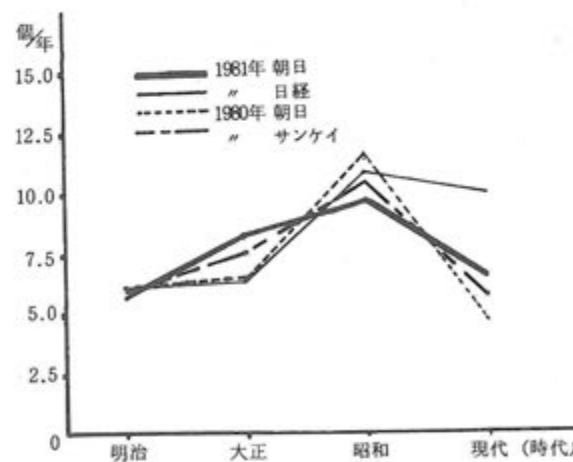
時代	1981年		1980年	
	朝日	日経	朝日	サンケイ
室町	1(0.1)	2(0.2)	0(0)	1(0.1)
安土桃山	0(0)	1(0.1)	0(0)	0(0)
江戸	18(2.2)	21(2.2)	17(2.1)	24(3.0)
明治	244(30.1)	255(26.2)	249(31.4)	260(32.3)
大正	114(14.0)	90(9.2)	106(13.4)	90(11.2)
昭和	192(23.6)	225(23.2)	208(26.2)	233(28.9)
現代	228(28.0)	358(36.6)	205(25.8)	164(20.3)
不明	16(2.0)	22(2.3)	9(1.1)	34(4.2)

昭和
元年～20年

現代
21年～現在

1980年と1981年は、明治・昭和・現代の3時代が大きい割合を占めていることで共通しているが、全く同じ傾向ではない。というのは、1980年は昭和が両紙とも現代よりも上回っているが、1981年になると、両紙ともに現代が昭和を上回っているからだ。このことは、現代に入ってくる外来語が毎年何%かあることを意味する。ここでも外来語が増えていることがわかる。

ここで面白いことは、その時代の個数をその時代の年代で割ると、年平均個数が出る。次のグラフはそれを示したものである。これによって外来語は、外交の拡大によって数が増えるといえる。



明治では総数の上ではすべて大正より多いが、その年平均個数を見ると大正より少ないのである。大正の方が多いのは、外交の拡大があったからだと思う。

ただ意外だったのは、昭和が現代よりも多かったことだ。この理由は何故かわからない。しかし、1980年の両紙よりも1981年が両紙とも現代において上回っていることから、すぐに現代の年平均個数は昭和を抜くと思う。

それにしても、現代の朝日新聞の年平均個数(4.7, 6.3)が、朝日新聞の

一面あたりの外来語の数の伸び(5個)と非常に近いことは、面白い事実である。

(2) 外来語全般について

①外来語には2つの種類(常時掲載型と短期掲載型)があると述べたが、また別の意味で2つの種類があると思う。

(a)外国から入ってきた言葉に対して、その意味を正確に表現する日本語がないため、やむを得ず発音に準じてカタカナ表記する場合である。例えば、「シャンデリア」だ。日本語で言おうとするなら、「装飾用花電燈の一種」や「懸垂式多灯型照明器具」などとなり、「シャンデリア」そのものの状態が日本語の表現で想像できない。

(b)外国語を使用すれば、文章や話しが目新しく格好がよくなるという理由から、日本語に入る場合である。例えば、「ナウなフィーリングをキープする」(ナウ… now フィーリング… feeling キープ… keep)や「ユーザーのニーズに答えて」(ユーザー… user ニーズ… needs)などである。

②(1)④・⑤からわかるとおり、外来語の数は増えている。そして氾濫している。この状態に対する学者たちの意見を書こう。

まず、この氾濫に対して非難する側の意見を紹介しよう。

- ・和製洋語(自由研究第5集PR50～51参照)があることにより、外国語学習に障害がおきる。
- ・今までにある言葉で表現できることを、わざわざ新しい言葉で表現する必要はない(②①b参照)。
- ・外来語は難解(特に商業・経済用語)である。
- ・漢字の熟語なら初めて見たときでも、字から意味の見当がつくのに、外来語(カタカナ表記)ではわからない。
- ・日本語の伝統の崩壊を呼ぶ。 など

次に、心配する必要はない、という意見を書こう。

- ・外来語の中で消えていったものもあるから、外来語が日本語を侵略し、日本語の形式を変えることはない。
- ・確かに数は多いが、定着しているかどうかを見れば、している言葉は少ない(2～3年もすれば消えていくものがある)。
- ・外国語学習に役に立つ面もある—後述。 など

見てもわかるとおり、さまざまな意見がある。私の意見としては、後者である。崩壊だとか、侵略だなどはなく、心配する必要はないと思う。できるだけ今の生活に役立てるようにしたい。

③それでは何故外来語は増えるのか。3年間の調査対象である朝日新聞の大阪本社に聞いてみた。解答は次のようなものだった。

原則としてなるべく使わない。実際増えているので、現時点では減らす方向へもっていきたい。しかし、増えるのは次の理由からである。記者が記事を書く場合、1分1秒遅れたら記事にならない場合がある。そのために記者は急いで書く。途中に外国語が出てきても適当な日本語訳がすぐに見つからない。記者は早く書かなくてはならないから、日本語訳せ

ず、原音に準じてカタカナで記事に書く場合がある。

というのが、朝日新聞社からの解答だが、日本語訳があるのに外来語が載っている（例えば冒頭の引用文、「セットした…」は何故「備えつけた…」ではだめなのか）のを見ると、記者の中にも、格好をつけ、故意に書く場合が必ずあると思う。

次に、私は、英語などの外国語をある程度知っている人が相当な数にのぼっているからだと思う。外来語もとの外国語の単語の意味を知っていれば、外来語の意味もわかる。外国語を知っている人が増えているため、新聞などの報道関係者は理解できるだろうと思ひ、外来語を書いているのではないか。

④これだけ氾濫している外来語を利用しないともったいないだろう。われわれは、カタカナで書かれた外来語を毎日見聞きして大体 2000 語知っている。この知っている外来語を英語の文章の読解に役立てればいいわけである。皆さんも、英語などの文を読んでいて、「○○か」と外来語によって読めたという経験をお持ちだと思う。

ここに英文をあげる。

Mr. Grey had a nice shop in the main street of a small town.

He sold jewelley, watches, clocks and other things like those.

これを外来語の知識で読んでも、この 2 文の大意はわかる。上の文から外来語として使用されているもの（斜字体）をカタカナ書きすると、

ナイスショップ、メインストリート、スモール、タウン、ジュエリー（広告でおなじみ）、ウォッチ、クロック

となる。

このように、外来語で英文がわかったのだから、日頃目にする外来語を覚えておいたら英語などの読解に役立つだろう。

しかし、いいことばかりではない。副作用がいろいろとついてくる。まず意味である。外国語から外来語になる場合、必ずといっていいほど意味がせまくなる。次の表はその例を集めたものである。

外来語	原 語	原語の意味（太字は外来語の意味）
アイドル	idol (英)	偶像・崇拜される人・ 人気者 ・
クイズ	quiz (英)	試問・ なぞ ・ あてもの ・
サイダー	cider (英)	りんご酒・炭酸水・
スマート	smart (英)	鋭い・抜目のない・ 小ぎれいな ・ しゃれた ・
タレント	talent (英)	才能・技量・ 放送の常連出演者 ・
ボス	boss (英)	上司・支配者・主人・ 親分 ・ 首領 ・
メーカー	maker (英)	作る人・ 製造業者 ・
ルーズ	loose (英)	解放された・解けている・ だらしない ・

われわれが覚えているのは太字ものばかりであるから、使うとき・聴いたときなど誤用誤解は避けられない。

次の問題は発音である。カタカナで書かれると、強弱がなくなり、外国語の単語にあるような強さはなくなる。それに、カタカナで「ア」は `ア、としか発音しないが、英語においては同じ「ア」でも、[æ][ʌ][ɑ:][ə:]とあり、`ア、のみでこれらを発音するとおかしくなる。その上、下の表のように、カタカナ表記は同じなのに、もとの意味、発音は違うことが生じる。

ハット	hat [hæt]	帽子	:	hut [hʌt]	小屋
バス	bus [bʌs]	乗合自動車	:	bath [bɑ:θ]	入浴
ハート	heart [hɑ:t]	心	:	hurt [hɜ:t]	傷つける
ファースト	first [fɜ:st]	第 1 の	:	fast [fɑ:st]	早い
キャリア	career [kæriə]	経歴	:	carrier [kæriə]	運搬人
トラック	truck [trʌk]	貨物自動車	:	track [træk]	走路

そのほか、l と r、s と th の発音の違いなど母音のみならず子音においても問題はおこる。この発音に関する問題は、外来語の最大の難点であると思う。

⑤外来語を日本語（漢字、ひらがな）で面白く表現する「新外来語和訳」を紹介しよう。

- ・カラフル——色彩乱調
 - ・ピンク——艶色
 - ・コミカル——ぶっ!
 - ・プライベート——私 密
 - ・ショッキング——どっきん、ぐっ
 - ・マカロニ——うろん
 - ・ダイナミック——^{かきまつく}大波来
 - ・メーカー——私然破壊
 - ・タフ——がんじょぶ
 - ・リコール——やめさ制
- 『翻訳の世界』
より抜粋

など結構おもしろい。別に、今の新聞の中の外来語をこのように書きかえるとか、話しの中でもこのようにしゃべろうとっているわけではない。ひまなときは頭をこんなことに使ってはどうかと思ひ書いてみた。それにしても、新聞の中の外来語がすべてこのように変わったらさぞかしおもしろいことだろう。

IV おわりに

この 3 年間に調べた「新聞の中の外来語」はあくまでカタカナの外来語であり、語源語は欧米の言語が中心になった。しかし、ここでよく考えてみると、今われわれが毎日読み慣れている漢字も外国（中国中心）から伝わったものだ。これも外来語と考えれば、外来語の占める割合は極めて大きくなる。

こんなことを考えれば、一体もともと日本語とは何なのか、漢字が日本語の中に溶け込んだように、外来語も溶け込むのではないかと、など疑問が出てくる。外来語を考えることは、日本と世界との関係を考えることであり、日本と世界の歴史や文化を考えることにつながる。

これからも長く興味を持ち続けたい。

○参 考 (変わっている外来語の紹介)

カッターシャツ…「勝った」にひっかけた運動着会社の造語。

ハッスル…1963 年米国遠征練習に行った阪神タイガースが滞在中に仕入れた言葉。

ホットドック…漫画家ローガンが、犬の肉が使われているといううわさに基いて作った言葉。